

## 「身体教育」の創出と天然痘 — 近世フランスの医学系育児マニュアルを手掛かりに —

長谷部 圭人

### はじめに

近世フランス社会史の名著として知られるアリエス『〈子供〉の誕生——アンシャンレジーム期の子供と家族生活』(1960)は、17世紀頃を境に「子供(期)」の存在が意識されるようになり、それが社会に浸透していく過程を「子供の発見 *découverte de l'enfance*」と表現し、家庭を舞台とする愛情の問題と学校を舞台とする規律化の問題を中心とする子供史を提示した<sup>1</sup>。子供についての特別の意識は中世から既に存在していたという指摘<sup>2</sup>や、子供と大人の間の青年期を等閑視しているという指摘<sup>3</sup>などが彼の所論の限界を示した一方、近世フランス教育史においてはイリイチ『脱学校の社会』(1971)の「学校化」やフーコー『監獄の誕生』(1975)の「大いなる閉じ込め」に先立つテーマ設定などが評価されたことで、同書は古典的作品としての地位を確立するに至った<sup>4</sup>。

これ以降、子供をめぐる近世フランス史研究は、学校生活を扱う教育制度史研究と家庭生活を扱う家族史研究の二つを主流に展開し、ジェンダー史・地方史・革命史などと交差して多様化していった<sup>5</sup>。こうしたなか、両研究分野に跨りつつ、学際的展開を遂げた近世フランス教育史

---

<sup>1</sup> フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生——アンシャンレジーム期の子供と家族生活』(杉山光信・杉山恵美子訳)みすず書房、1980年

<sup>2</sup> Jean-Louis Flandrin, *Familles, parenté, maison, sexualité dans l'ancienne société*, Paris, Seuil, 1984; Nicholas Orme, *Medieval Children*, New Haven, Yale University Press, 2003.

<sup>3</sup> Natalie Zamon Davis, « The Reason of Misrule: Youth Groups and Charivaris in Sixteenth Century France », *Past and Present*, no.50, 1971, pp. 41-75.

<sup>4</sup> アリエスの著書に対する反響に関しては、宮澤康人「アリエスの近代と子ども・家族・学校——『〈子供〉の誕生』を超えるまえに」宮澤康人編『社会史のなかの子ども』新曜社、1988年を参照のこと。

<sup>5</sup> 教育制度史では、Roger Chartier, Marie-Madeleine Compère, Dominique Julia, *L'éducation en France du XVIe au XVIIIe siècle*, Paris, Cedes-CDU, 1976; Egle Becchi, Dominique Julia, *Histoire de l'enfance en Occident*, t.I-II, Paris, Seuil, 1997; François Grèzes-Rueff, Jean Leduc, *Histoire des élèves en France, De l'Ancien Régime à nos jours*, Paris, Armand Colin, 2007; 天野知恵子『子どもと学校の世紀——18世紀フランスの社会文化史』岩波書店、2007年、家族史では、Jean-Louis Flandrin, *Familles, parenté, maison, sexualité dans l'ancienne société*; Marie-Françoise Lévy, *L'enfant, la famille et la Révolution Française*, Paris, Olivier Orban, 1990; Lynn Hunt, *The Family Romance of the French Revolution*, London, Routledge, 2013[1997] (リン・ハント『フランス革命と家族ロマンス』(西川長夫・平野千果子・天野知恵子訳)平凡社、1999年)を代表的な研究として挙げたい。

研究は、概して礼儀作法や人格陶冶といった子供の内面からの自己規律化や学問・宗教教育に主眼を置き、デカルト的な心身二元論に基づいてこれと対照をなす身体教育 *éducation physique* を副次的要素として解釈してきた<sup>6</sup>。確かにロック『教育に関する考察 *Some thoughts concerning Education*』（1693）やルソー『エミール *Emile ou De l'éducation*』（1762）の影響の下、18世紀フランスの教育書は全般的に徳や理性を涵養することを目的とする、内面の教育を重視する傾向を強めていったが、特に医学の領域において当時、身体教育もまた関心を集める議題であった<sup>7</sup>。

また先行研究は概して、身体教育について体操やダンス、ジュ・ド・ポームといった道徳的に認められた遊びや、ラ＝サールのキリスト教学校修道会のような学校で制度化した身体訓練——所謂体操 *gymnastique* の領域にのみ焦点を当ててきた。実際、アリエスも18世紀フランスの医師たちは16世紀のイタリア系医師ジローラモ・メルキュリアーレの医学書『体操について *De Arte gymnastica*』をイエズス会経由で摂取し、体操の重要性を主張するに至ったとして、体操に関心を集約させている<sup>8</sup>。こうした身体教育における体操重視の傾向は、18世紀後半以降のパトリオティズムの擡頭による軍事訓練としての身体教育の前景化、さらには19世紀以降の近代的な身体教育解釈への合流を踏まえれば、後世の解釈と整合的であろう<sup>9</sup>。しかし実際のところ、ルイ15世によるイエズス会解散前後の教育論ブームとともに勃興した身体教育は、体操の領域だけでなく、食事や沐浴、衣服といった子供の衛生に対する実践全般も包括する語彙であったという<sup>10</sup>。つまり、この語彙は本来、運動や体操という側面だけでは把握できない部分を有していたのであり、従来の研究にはそうした同時代的視点が欠如していたと考えられるのである。

そこで本論は、身体教育の成立過程、およびその歴史の変遷に注目しつつ、この全体像を歴史的に再構成することを目指したい。具体的な対象史料としては、ヴァランベール『生まれた子供を養い、管理する方法に関する五つの書 *Cinq livres de la manière de nourrir et gouverner les enfants dès leur naissance*』（1565）からロ・ド・ボワッシー『種痘の問題に関する母親たちへの意見 *Avis aux mères au sujet de l'inoculation*』（1775）までの「育児マニュアル」、即ち医師が子どもの育て方を読者に指南する俗語の医学書を設定し、身体教育をめぐるジャンル固有の戦略を分析

<sup>6</sup> 近世・近代フランス教育史の先行研究については、天野前掲書、1－15頁を参照のこと。

<sup>7</sup> 同著は1695年に仏訳された。また、例えばモンクリフ『気に入られる必要性和方法についての試論』（1738）も「外見 *parure*」より理性や優れた感性を子どもに与えることが教育の最大の目的だと指摘している（François-Augustin de Paradis de Moncrif, *Essais sur la nécessité et sur le moyen de plaire*, Paris, Classique Garnier, [1738] 2023）。

<sup>8</sup> アリエス前掲書、86頁

<sup>9</sup> Georges Vigarello, *Le corps redressé: Histoire d'un pouvoir pédagogique*, Paris, Armand Colin, 2001; Alain Corbin (dir.), *Histoire du corps. De la Renaissance aux Lumières*, t. 1-2, Paris, Seuil, 2005.

<sup>10</sup> André Rauch, *Le Corps en éducation physique : Histoire et principes de l'entraînement*, Paris, Presses universitaires de France, 1982; Id., *Le Souci du corps : Histoire de l'hygiène en éducation physique*, Paris, Presses universitaires de France, 1983.

することとする。そして、同問題と対峙するうえで、筆者が研究対象に据えてきた天然痘対策および種痘をめぐる一連の議論も重要な補助線になると考えられる<sup>11</sup>。というのも、子供が生まれつき血中に天然痘の胚を持っているとする「生來說」が18世紀後半まで最も有力な学説であったため、天然痘対策はあらゆる子供の衛生に関わる身体教育の重要カリキュラムと認識されていたからである<sup>12</sup>。つまり、育児マニュアルにおける天然痘・種痘関連の記述を分析する作業は、医学的観点から形成された医師の教育論が如何に天然痘と対峙し、ルイ15世期(1715-1774)を中心に勃発した種痘論争を受容したかを解明するだけでなく、これまで等閑視されてきた身体教育の異なる側面を剔抉することにも寄与するだろう。このため、本論致では、身体教育の重要カリキュラムを構成した天然痘対策および種痘関連の記述に注目しながら、身体教育の歴史の変遷について新たな検討を試みることにしたい。

## 1. 「身体教育」前史 — ヴァランベール『五つの書』における子育て観

「身体教育 *éducation physique*」の語彙が登場する以前、子供をめぐる体操の問題、および天然痘対策を含む衛生の問題はどのような枠組を用いて論じられていたのだろうか。最初期の育児マニュアルの一つ、アンリ3世の主治医シモン・ド・ヴァランベールの『生まれた子供を養い、管理する方法に関する五つの書』(1565)はガレノス、オリバシウス、アイギナのパウロスといった古代ギリシア・ローマの医師、ラーズィー、マジュースイー、イブン・スィーナーといったイスラム世界の医師からルイ12世の主治医ガブリエル・ミロンまでの著書を参照したうえ、俗語で執筆された本格的な医学書である。同書は既に16世紀からラテン語の読めない読者層を想定し、医師が子供の身体への教育的働きかけを試みていたことを裏付けるものである。出産したばかりのサヴォワ公爵夫人への献辞を伴い、形式上は彼女に向けて執筆されているものの、実際の教育対象としては乳母や助産婦、養育係が想定されており、親にはこれらの人物を正しく選定することのみが義務付けられている<sup>13</sup>。したがって、当時、貴顕の人々の子供を養い、管理する役

<sup>11</sup> 種痘論争は18世紀初頭、大英帝国に伝来した種痘(人痘)技術の国内導入をめぐり、ルイ15世期を中心にフランス王国で展開された当時最大の医学論争である。詳細は、拙稿「18世紀フランスにおける種痘論争の始動——1723-1754年の展開を中心に」、『総合人文科学研究センター研究誌 WASEDA RILAS JOURNAL』、第10号、2022年、135-147頁、および「十八世紀中葉フランスにおける医学専門誌と種痘論争——『ジュルナル・ド・メドゥシーヌ』と『ガゼット・サリュテール』を中心に——」『史観』第188冊、2023年、54-78頁を参照されたい。

<sup>12</sup> 生來說に対する批判は、モンペリエ大学医学部の生氣論者ジャン=ジャック・ポーレ『天然痘の歴史および子供を守り、フランスの感染を止める方法』(1768)で初めて大々的に主張された(Jean-Jacques Paulet, *Histoire de la petite vérole, avec les moyens d'en préserver les enfans et d'en arrêter la contagion en France*, Paris, Ganeau, 1768)。

<sup>13</sup> 同著の先行研究としては、Marie Lanselle, « Un puériculteur oublié: Simon de Vallambert », dans *Bulletin de la Société française d'histoire de la médecine*, no. 27, 1933, pp. 250-258が挙げられる。

割は、定説どおり両親（母親）に期待されていなかったと考える方が自然であろう。

『五つの書』の内訳は①乳母の選び方、②新生児を管理する方法についての助産婦と妊婦、乳母への指導、③離乳前の子供を養い、管理する方法、④離乳後の子供を養い、管理する方法、⑤子供の病気を治す方法、となっているが、子供の病気の細かい解説を伴う第五の書が同書の半分近くを占めている<sup>14</sup>。そして、第四の書は離乳以後の子供の問題を扱う、後の「育児マニュアル」に該当する部分と見做することができるが、その目的は次のように示されている。

子どもの離乳を問題にした後こそ、離乳後の管理について扱う時である。何故なら乳母を離れた後は、養育係 *gouverneur, gouvernante* の手元に置き、6-7歳、あるいは学校教師のところに行かせるまで、健康を養い、管理したうえで様々な教えを施す必要があるからである。子どもの心の変容、言葉、身体の部位の強化、食べ方や飲み方などを年齢や生来の気質に合わせて知ることは些細な問題ではあるまい<sup>15</sup>。

かくして第四の書は、飲酒の禁止や4回の食事と睡眠、清潔な湯での入浴、目や耳の掃除の重要性といった子供の身体にまつわる問題から、子供の叫びと涙の原因を探究することをはじめとする精神にまつわる問題まで、子供への細やかな管理を指示する内容になっている。また音楽と体操は心身ともに成長を促すため、文章や祈りよりも先に教えるべきとも主張し、体操に関しても言及した<sup>16</sup>。

ヴァランベールはこのように子供の心身に関わる多種多様な問題に言及したわけだが、身体を良い気質のまま維持し、健康を保つことが精神の病を遠ざけ、優秀な子どもを生み出すという全体の論旨は一貫しており、これは17世紀末以降のフランス医学界を席卷した精神と身体との分離を強調するデカルト主義的医学機械論とは根本的に異なる発想に基づいた主張と言える<sup>17</sup>。しかし、18世紀中葉以降に「衛生 *hygiène*」という枠組に回収されていく身体のケアに関する問題、そして体操に関する問題に同時に言及した点は、後の身体教育との連続性を考えるうえで注目に値しよう。また、内科医ヴァランベールが必ずしも内面の教育を偏重しなかったことも、後代の育児マニュアルとの関係に鑑みれば特筆すべき点と言えよう。

さらに第五の書「子供の病気を治す方法」を繙くと、同書は天然痘と麻疹に多くの紙幅を割いており、これらを「広く子供に見られる病気」として紹介している。天然痘の病態や治療法に関する認識は、同時代の内科医・外科医アンブロワーズ・パレが『ペスト・天然痘・麻疹について

<sup>14</sup> Simon de Vallambert, *Cinq livres de la manière de nourrir et gouverner les enfants dès leur naissance*, Poitiers, Les de Marnefz et Bouchetz frères, 1565.

<sup>15</sup> *Ibid.*, pp. 164-165.

<sup>16</sup> *Ibid.*, pp. 189-190.

<sup>17</sup> デカルト主義的医学機械論についての詳細は Laurence Brockliss and Colin Jones, *The Medical World of Early Modern France*, Oxford, Oxford University Press, 1997, pp. 418-433 を参照のこと。

の試論 *Traicté de la peste, de la petite verolle et rougeolle*』(1568)で披瀝したものと基本的に考え方を共有している<sup>18</sup>。即ち、天然痘と麻疹の見分け方については正確に理解する反面、これらをペストと同質の病気と捉え、ペストの治療法を適用した点に共通項が見出される。治療法として食餌療法と発汗を重視する点もパレと類似しており、ヴァランベールは特に煎じたブドウの木の根やレモン、酸っぱいシロップ oxysacchar を天然痘の治療薬として推奨している。また後遺症である痘痕についても対策を講じており、特に痕跡が残りやすい目・鼻・喉・肺を守ることを優先し、目の痘痕についてはアンモニア、ミント、熱した蜂蜜を、他の部位に残った痘痕についてはミルラか麝香と熱したワイン酢の灰を推奨している<sup>19</sup>。痘痕の治療については9-10世紀のムスリム医師ラーズィーに準拠していることもあり、ミルラや麝香のような入手困難な高級品が多く、16世紀当時のフランスでは王侯貴族の子女を除けば、殆ど現実的な治療法ではなかったと考えられる。

以上のように、『五つの書』は、身体教育の勃興以前から内面的な教育との連関に目配りしつつ、衛生と体操の問題を子育ての最重要課題として意識していた。また同書が天然痘を子供特有の病気とする認識を既に16世紀から披瀝していたことも明らかになった。つまり、天然痘の罹患予防を目的とする種痘が登場する以前から、天然痘の治療あるいは後遺症である痘痕の治療と予防は、育児マニュアルの重要な検討課題であったのである。とはいえ、乳母や助産婦、養育係が家庭の教育者として雇われ、衛生と体操に関する細やかな配慮が為され、天然痘で落命したり、痘痕で美貌を損なったりしないよう注意が払われるという環境は、当時において特異であり、殆どの子供にとって無縁であったと考えられる。また、同書で示された、美貌を備えた優秀な子供を生み出すための様々な方策がしばしば男子・女子双方に適用可能である点も注目に値する。これは、性差に応じた教育よりも子供の死亡率の高さへの懸念が同時代において優先されていた証左と解釈できよう。このように『五つの書』には、後代の育児マニュアルの萌芽というべき多様な問題関心が垣間見られるが、限られた王侯貴族の子女の生存を至上命題と捉えたために、時に一般的な子育てや治療法とはかけ離れた現実味のない指摘も見受けられた。

## 2. 「矯正」から「教育」へ

しかし17世紀後半以後、デカルト主義的医学機械論に基づく介入主義的な傾向が色濃くなると、健康維持を目的とする衛生や体操の問題よりも、子供の身体の歪み *difformité* に個別的かつ直截的に対処する方法に関心が集中し始めた。例えば、パリ大学医学部の内科医クロード・ゲランがルイ14世妃マリー・テレーズの主治医ルイ＝アンリ・ダカンに捧げた育児マニュアル『医学の方法に従い子供を育てる方法 *Méthode d'élever les enfans selon les règles de la médecine*』(1675)

<sup>18</sup> Ambroise Paré, *Traicté de la peste, de la petite verolle et rougeolle*, Paris, André Wechel, 1568, pp. 228-229.

<sup>19</sup> Simon de Vallambert, *op.cit.*, pp. 248-273.

は、シミ tâche や頭に残った羊膜の断片 coiffé のような先天的な歪みを手術で取り除けば、子供が優れた精神と膂力を得ることができると指摘するなど、子供の身体への直截的介入の重要性を説いた<sup>20</sup>。かくして子育てに対する医学の介入は、それまでの緩やかなやり方から一転して、時に外科的治療を伴う直截的な方法へと切り替わっていった。

パリ大学医学部出身の医師ニコラ・アンドリイ・ド・ボワルギヤールが著した『整形外科学 *L'orthopédie ou l'art de prévenir et de corriger dans les enfants les difformités de corps*』(1741) もこうした介入主義の嚆矢を示す好例の一つに数えられるだろう。同著はしばしば整形外科医学の元祖にあたる作品として位置づけられるが、副題に「子供の身体の歪みを予防し、矯正する技芸」とあるように、実際には乳幼児から思春期 *puberté* までの子供の身体に関する諸問題を総合的に扱った育児マニュアルとしての性格も有している<sup>21</sup>。同著の序文には「整形外科学 *orthopédie*」という用語の由来が次のように示される。

問題になっている題名について、私はそれを二つのギリシャ語の単語から作り出した。つまり「真っ直ぐ、歪みのない、正確さに基づいた」を意味する «*Orthos*» と「子供」を意味する «*paidion*» である。この二つの語彙から私は「整形外科学 *orthopédie*」を創出し、一言で私の目的、つまり子供の身体の歪みを予防し、矯正する様々な方法について教える計画を表現したのである<sup>22</sup>。

同著の「子供の身体の歪みを予防し、矯正する」目的は、扉絵に描かれた添木を施された湾曲した木のイメージに対応する(図1)。子供の身体に対して整形外科学を中心とする医学が担う役割はまさしくこの添木に喩えられる。かくしてボワルギヤールは頭・眉・目・鼻・耳・口といった顔のパーツ、手足、胸、腹、肌等の部位ごと、あるいは変形、変色、震え、痺れ、痛み等の症状ごとに分け、それぞれの歪みを予防・矯正する方法を解説する形式を採った。それ以外にも椅子の座り方や歩き方といった、女子の「正しい」身のこなしについて図版付きで論じる箇所や、後の「生体工学」に該当するような領域——即ち子供の使う正しい椅子・机・ベッド等に言及する箇所も見られ、独特の議論が展開されている<sup>23</sup>(図2・図3)。また、見た目の美しさに議論を集中させていることもあってか、女兒を扱うことが多い点も同著の特徴として挙げられよう。

こうしたなかで、ボワルギヤールが天然痘にも特別な関心を寄せていた点は注目に値する。天然痘は作中で子供にしばしば見られる病気と位置付けられており、特に「天然痘による顔の皮

<sup>20</sup> Claude Guérin, *Méthode d'élever les enfants selon les règles de la médecine, Régime de vivre des vieillards, et un traité de la goutte*, Paris, Veuve d'edme martin, 1675, pp. 11-13.

<sup>21</sup> Nicolas Andry de Boisregard, *L'orthopédie ou l'art de prévenir et de corriger dans les enfants les difformités de corps*, t.1-2, Paris, Le veuve alix; Lambert et Durand, 1741.

<sup>22</sup> *Ibid.*, p. ii.

<sup>23</sup> *Ibid.*, pp. 60-78.

膚の歪み」——即ち痘痕は顔の歪みに関する最初の項目で詳しく紹介されている。彼によれば、痘痕は「多くの人間の美観を損ねる最大の理由」であり、その予防・治療として食餌療法やバラ水の塗布等の様々な方策が提示されている。だが、アンブロワーズ・パレ『ペスト・天然痘・麻疹についての試論』に見られる赤い布で顔を覆う昔ながらの治療法に対しては、ボワルギヤールは興味深い反論を行っている<sup>24</sup>。

しかし、顔を隠すためには、自由に呼吸できるスペースがある程度に前方の両端が離れた頭巾の形に裁断した、少し丈夫な生地で念入りに顔を覆う必要がある。もっともそのカバーやベッドカバーが何色であるかは重要ではない。私がおのような指摘をする理由は、天然痘には赤い毛布だけを使わなければならないと思い込んでいる人が毎日見つかるからだが、それは間違いである。この空想の原因となったのは、少しでも分厚い毛布は赤色のものしか作らない、というかつての毛布職人の慣習である。薄い毛布には別の色も使われている。これは古い時代の毛布をいくつか見れば分かることである。かくして生地がより分厚く、よく毛の生え揃った赤い毛布は他の色の毛布よりも温かいので、内科医たちはそうした理由から天然痘には赤色の毛布が他のものより適切だと命じたのである。これが謎の全貌である<sup>25</sup>。

このように『整形外科学』は、子供の身体の歪みを予防・矯正する様々な方策を披瀝すると同時に、同時代の進歩主義的価値観を共有し、従来の医学の誤謬や迷信を正すことも試みた。また、子供の身体の歪みは同書の説得対象でもある父親と母親、あるいは育てるべき子供のいる人間が医師に正しい治療を行わせればほぼ矯正可能である、という全体の論旨も、啓蒙期の内科医の楽天的な介入主義を彷彿とさせる<sup>26</sup>。実際には痕跡を消しきれず付け黒子 mouche のような装飾で隠すというファッションが流行したとはいえ、基本的に肌の柔らかい子供の方が予防・治療が容易とされる天然痘や痘痕の問題は、こうした全体の主張と極めて適合的であったと言えよう。しかし当時、徐々に話題になり始めていた種痘に関しては、著者が認知していなかったためか、あるいは係争中の問題に言及することを避けたためか、一切記述されていない<sup>27</sup>。かくして育児マニュアルは、健康で美しい子供を生み出すという共通目的の下、衛生と体操のみならず、身体の歪みを医学的に予防・矯正する様々な方法について議論するようになっていったのである。

<sup>24</sup> 「子供は温かく、風の入らない部屋に閉じ込め、深紅の梳毛織物か他の赤い布、つまり典礼書の保護カバーやベッドの毛布のような色の毛布で包むべきである。そして天然痘や麻疹が全て外に出るまで、どうにか子供をそれで覆ったままにすべきだろう。」(Ambroise Paré, *op.cit.*, pp. 228-229.)

<sup>25</sup> その直後には、赤色の医学的効果について、それが「ディクマーブローク « Dicmerbroech »」なる人物に由来する説であるとの説明がなされている(Nicolas Andry de Boisregard, *op.cit.*, pp. 182-184)。

<sup>26</sup> Laurence Brockliss and Colin Jones, *op.cit.*, pp. 421-424.

<sup>27</sup> 当時の種痘論争の状況について詳しくは拙稿「18世紀フランスにおける種痘論争の始動」、135 - 147 頁を参照されたい。

『ジュルナル・ド・メドゥシーヌ』の初代主幹を務め、種痘論争においては中立的立場を標榜した内科医シャルル＝オーギュスタン・ヴァンデルモンドが執筆した『人類を完璧にする方法についての試論 *Essai sur la manière de perfectionner l'espèce humaine*』(1756) も同じ系譜に位置付けられる著作である<sup>28</sup>。彼は多数の人間が神から与えられた美貌 *beauté* と活力 *force* を失い、歪みの犠牲者 *victime de la difformité* になっている現状を危惧し、精神・肉体双方の美貌を取り戻すため、妊婦と子供に対して予防医学 *médecine préservative* を適用することの重要性を説いた。同書はこのように明らかに『整形外科学』を前提として一連の主張を展開しているが、内容においてはボワルギャールの展開した議論よりも、寧ろ食事を中心とする衛生、そして体操の問題に終始している。これは即ち、ヴァンデルモンドが子供の身体をめぐる諸問題を身体の歪みの予防という枠組を使って論じたということの意味する。こうして子供の身体を美しく完成させるための健康維持にまつわる様々な医学的方策が、かかる枠組の下で議論されることになったわけだが、係争中の種痘については同時期に論争に参加していたヴァンデルモンドでさえも沈黙を貫き、子育てのカリキュラムに組み込むことはしなかった<sup>29</sup>。

だが、歪みの予防や矯正を積極的に標榜し、身体美の回復を目標とする著作は、この後、徐々に姿を消していくことになる。それは子供の身体の不完全性を克服することについて「教育 *éducation*」の語彙が使われるようになっていったためである。ヴァンデルモンドの著書が出版される二年前、既に「教育」を題名に掲げる育児マニュアルが登場していた。パリ大学医学部の内科医ニコラ・ブルーゼが著した『子供の医学的教育についての試論 *Essai sur l'éducation médicinale des enfants et sur leur maladies*』(1754) はその序文において、育児マニュアルが教育という語彙を導入することについて次のように述べている。

最も広い視座の下での子供の教育は多数の対象を見渡しているが、それが「教育」という言葉で表現される習慣はなく、一般的にその枝分かれの一つである「精神教育 *éducation morale*」を意味している。しかしながら、一般的な意味において子供を育てるということを教育の語は含んでいるのであり、精神を教化し、神・社交界・彼自身のために心を成形する（これは精神教育が真に唯一の対象としていることである）だけでなく、それは生成に必要なものを与え、出産と身体の成長に気を配り、器官と気質を悪癖から守り、その機能に秩序と恒常的な連続性を備え付けること、一言で言えば子供を大人、あるいは人間にすることでもある。これこそ私が「医学的 *médicinale*」と呼ぶ教育の目的である<sup>30</sup>。

<sup>28</sup> 詳細は拙稿「十八世紀中葉フランスにおける医学専門誌と種痘論争」、59 - 66 頁を参照されたい。

<sup>29</sup> Charles-Augustin Vandermonde, *Essai sur la manière de perfectionner l'espèce humaine*, Paris, Vincent, 1756.

<sup>30</sup> Nicolas Brouzet, *Essai sur l'éducation médicinale des enfants et sur leur maladies*, Paris, Veuve Cavelier & fils, 1754, pp. i-ii.



ブルーゼは「教育」という語彙が精神教育についてのみ使用される当時の状況に疑義を呈しながら、子供の身体の成長を補助することについて同語彙が使用可能であることを初めて主張した。このように育児マニュアルが「教育」を標榜し始める傾向は同時代の他の著作にも見られ、ジャン＝シャルル・デゼッサルツ『幼年期における肉体的教育論 *Traité de l'éducation corporelle des enfants en bas âge*』（1760）もこれに該当する。「医学的」あるいは「肉体的 corporelle」と教育に付加される形容詞には揺らぎが見られるため、1750 - 1760 年代が過渡期であったことが確認できよう<sup>31</sup>。とはいえ、教育を掲げながらも内容に大きな変化は見出されず、ブルーゼとデゼッサルツは相変わらず、それぞれに子供の食事や寝具、着物といった衛生の問題、そして体操の問題を議論の中心に据えたのである。

一見して題名を除いて新しい要素が感得されないため、両名の著書はそれ以前の議論の焼き直しのように思われる。ミッシェル・フーコーも特に18世紀中葉以降、子供の健康維持が医学の至上命題になったことを指摘するうえで、ボワルギヤール以降のこれらの著作を同質の作品群として列挙している。しかし、それ以前の育児マニュアルとの細かい相違点にもここで目を凝らす必要があるだろう<sup>32</sup>。それは、この二作品の背景に、人口増加を続ける18世紀フランスの現実にもぞぐわぬ人口減少への懸念が示されているということである<sup>33</sup>。『幼年期における肉体的教育論』には次のように記されている。

自然が衰退し、間もなく枯渇して退廃した状態になるという発言は毎日聞かれる。人気のない村にはもはや農民はおらず、大都市では毎年住民の数の減少が見られ、国は過疎化する。[中略] 我々はそう思っていないが、それが決して増えていないことも確信している。しかしながら、大都市における人口減少は本当で、明白なのである<sup>34</sup>。

当時の医師たちが現実には起きていない人口減少をどの程度実感していたかは不明だが、少なくとも1760年代以降のコレージュ改革を皮切りに、活発に議論されるようになった教育の問題に彼らが介入する口実として、こうした問題提起は十分に機能していたと言える<sup>35</sup>。つまり、医師の著した育児マニュアルが子供の身体の歪みの予防と矯正に対する問題意識を徐々に教育の問題

<sup>31</sup> Jean-Charles Des Essartz, *Traité de l'éducation corporelle des enfants en bas âge, ou Reflexion sur les moyen de procurer une meilleure constitution aux Citoyens*, Paris, Jean-Thomas Herissant, 1760.

<sup>32</sup> ミッシェル・フーコー「十八世紀における健康政策」『フーコー・コレクション6 —— 生政治・統治』（小林康夫他訳）、ちくま学芸文庫、2006年、290 - 291頁。

<sup>33</sup> Laurence Brockliss and Colin Jones, *op.cit.*, pp. 459-473 も人口減少に対する危惧が食事や空気といった衛生問題や子供の健康、産科学への関心を高めたと指摘する。

<sup>34</sup> Jean-Charles Des Essartz, *op.cit.*, p.VI.

<sup>35</sup> 1764年のイエズス会解散と関連する一連のコレージュ改革については、天野知恵子「十八世紀フランスのコレージュ改革とパリ高等法院」『史林』第72巻3号、1989年、402 - 434頁を参照のこと。

へ転化していくプロセスは、明らかにイエズス会解散前後の教育論に対する需要と呼応しているのである。

### 3. 身体教育の創出と種痘

ブルーゼとデゼッサルツを経て、「身体教育 *éducation physique*」という表現を最初に用いた育児マニュアルはジュネーヴの内科医ジャック・バレクセールが著した『子供の身体教育についての論文 *Dissertation sur l'éducation physique des enfants depuis leur naissance jusqu'à l'âge de puberté*』(1762)であった<sup>36</sup>。同著は新生児の世話の仕方・食事・病気の対処方法といったこれまでの主題をほぼ全て踏襲したうえで、出生から思春期までの子育てを医学的観点から論じる極めてオーソドックスな育児マニュアルとして特徴づけられる。これ以降、身体教育はソスロット『妊娠中の子供の保護と身体教育について *De la conservation des enfants pendant la grossesse, et de leur éducation physique*<sup>37</sup>』(1796)、プレヴォ＝レゴニ『子供の身体教育についての試論 *Essai sur l'éducation physique des enfants*<sup>38</sup>』(1813)のような著書が存在が示すように、医師が執筆する育児マニュアルの定型表現として定着していった。

バレクセールの所論とブルーゼやデゼッサルツの所論の間に大きな相違点は見出されないものの、『子供の身体教育についての論文』の最大の特徴として、育児マニュアルのなかで初めて子供の身体教育の一環で種痘を推奨したことが指摘できる。

5-6歳から8-10歳の年齢である場合、まだ罹っていない子供は天然痘の種痘が必要である。この種痘はそれを指導する賢い医師たちのあらゆる用心と共に行われる。この実践はしばしば惨禍を起し、殆どの人間が人生で一度罹ることから逃れられない、恐ろしい伝染性の病気に対する賢い予防策である。(中略)我々がこの病気に罹る時には、体がそれを受け入れる準備をすることが非常に重要なのである<sup>39</sup>。

まずバレクセールは同著の冒頭でオルレアン公の侍医でパリ大学医学部の種痘擁護論派のリーダーのアントワーヌ・プティへの献辞を掲げ、種痘擁護派としての旗色を明示した。そしてこの

<sup>36</sup> 同著についての先行研究に Jacques Gleyse et al., « L'éducation physique de Jacques Ballexserd: un discours « moderne »? », dans *Avante*, 2001, Vol.7, No.1, pp. 51-65 がある。

<sup>37</sup> Nicolas Saucerotte, *De la conservation des enfants pendant la grossesse, et de leur éducation physique*, Paris, Guillaume, 1796.

<sup>38</sup> Pierre Prévot-Leygonie, *Essai sur l'éducation physique des enfants*, Paris, l'imprimerie de Didot jeune, 1813.

<sup>39</sup> Jacques Ballexserd, *Dissertation sur l'éducation physique des enfants depuis leur naissance jusqu'à l'âge de puberté*, Paris, Vallat-la-Chapelle, 1762, pp. 170-171.

ように、種痘が天然痘そのものだけでなく、後遺症である痘痕を予防する手段でもあると主張したのである。これまでヴァンデルモンドのように種痘論争を認知している医師でも、育児マニュアルでは言及を避けてきたため、同著は種痘問題について初めて触れた作品と位置づけられる。1774年にルイ16世が種痘接種を決断した後であれば、積極的に種痘擁護論を展開し、子供の身体を教育する手段の一つとして種痘を紹介する内科医ニコラの『新生児に対する自然の叫び *Le cri de la nature, en faveur des enfants nouveaux nés*』(1775)のような著作も見られるが、種痘論争の渦中において出版された同著は異例のケースであり、その論争的性格は最大の特徴であろう<sup>40</sup>。

しかし、種痘論争の渦中で出版された他の育児マニュアルにも同論争の影響は見受けられる。実際、『ローラン氏のダリオ神父氏への天然痘の種痘に関する手紙 *Lettre sur l'inoculation de la petite vérole*<sup>41</sup>』(1755)で種痘に否定的な見解を示していた医師ローランは、彼の上梓した浩瀚な育児マニュアル『子供の保護について *De la conservation des enfants*』(1768)で天然痘が母親から胎児に遺伝するという説を唱え、天然痘を妊婦と乳幼児にとって危険な病気と警戒しながらも、種痘には一切言及しなかった<sup>42</sup>。だが、捨て子の「身体教育」を論じた箇所からも判るように、彼の議論は明らかにバレクセルの著作を踏まえている。ここから種痘については意図的に言い落とされたと推定できるのである。

また、教育書の枠組で種痘について論じた重要な作品として、奇しくもバレクセルの著作と同年に出版されたルソー『エミール』(1762)についても論及する必要があるだろう。彼の種痘に対するアンビバレントな見解は次のとおりである。

我々は彼らが低年齢の頃に天然痘を種痘するべきか、或いは彼らが天然痘に自然に罹るのを待つべきだろうか？第一の解決策は我々の慣行により適ったもので、人生が最も貴重でない年代にリスクを冒して、人生が最も貴重な年代を危機から守るというものである。ただし、リスクの名は巧く管理された種痘にのみ与えられる。それに対して第二の解決策は、我々の一般的な信条により適ったもので、自然だけが気を配っていたが、人間が介入しようとした途端に自然が全て放棄するという懸念から、全てを自然のままに任せるというものである。自然的人間は常に準備ができています。その師である自然が種痘を行うのに任せれば、我々よりも良いタイミングを選ぶだろう。私が種痘を非難していると思っはいけない。というの

<sup>40</sup> Pierre-François Nicolas, *Le cri de la nature, en faveur des enfants nouveaux nés*, Grenoble, Giroud et fils, 1775, pp. 148-167.

<sup>41</sup> Joseph Raulin, *Lettre sur l'inoculation de la petite vérole par M. Raulin de l'Académie Royale des belles-lettres, Sciences et Arts de Bordeaux et docteur en Médecine à M. Dario le Père, Docteur en Médecine de la faculté de Montpellier, au Port Saint-Marie, dans la Province en Guyenne*, Paris, sn, 1755.

<sup>42</sup> Joseph Raulin, *De la conservation des enfants, ou les moyen de les fortifier, de les préserver et guérir des maladies, depuis l'instant de leur existence, jusqu'à l'âge de puberté*, t.1-2, Paris, Merlin, 1768, pp. 466-473.

も、私が自分の生徒に種痘を避けさせる論理はあなた方の論理ととても相性が悪いからである。あなた方の教育は、子供が天然痘に襲われた時に天然痘を避けまいよう仕向けるものである。もしあなたが天然痘に考えなしに罹らせるならば、おそらく子供たちは死んでしまうだろう。私は様々な国で種痘の必要が高まるにつれて人々が抵抗していることを知っているが、その理由は表出している。私はこの問題をエミールのために敢えて扱うことは殆どしないだろう。彼は時間・場所・状況によって種痘を接種させるかもしれないし、させないかもしれない。それは彼にとって殆どどうでもよいことである。もし彼に天然痘を与えたならば、彼の病気を予見し、前もって知ることができるだろう。結構なことである。しかし自然に感染するならば、彼を医者に掛からせずに済む。それはもっと良いことである<sup>43</sup>。

ルソーは天然痘を防ぐ一つ的手段として種痘を承認しつつも、良く管理された種痘のみに効力を認めるという見解を示した。だが同時に、医者に掛からせずに済むので、自然に任せることは種痘よりも良いとも述べている。即ちルソーは『エミール』で積極的に種痘擁護論の立場をとらず、医者への懐疑を示すためにこの問題に論及したのである。事実、ルソーはジュネーヴ事件で種痘擁護論者のリーダー的存在である医師トロンシャンと対立しており、この主張には個人的な敵愾心も多分に含まれているだろう<sup>44</sup>。だが、主張としては自然に任せるという『エミール』の論旨と違和感なく合致するものでもある。いずれにせよ、種痘が教育の問題として語られ始めたことはこの時期の身体教育観の変化として重要と言えよう。

ところで、『エミール』と育児マニュアルの関係についてはどのように捉えるべきだろうか。一般的に『エミール』は自分の子供に授乳することの重要性を説き、家庭教育における母親の役割を強調した近世フランス教育史の画期を示す作品である<sup>45</sup>。だが、かかる主張が同年に出版されたバレクセル『子供の身体教育についての論文』、さらには17世紀のゲラン『医学の方法に従い子供を育てる方法』にまで遡りうることはあまり認知されていない<sup>46</sup>。事実、育児マニュアルが指定する子供の身体教育の担い手は、ルソーの著作よりも早く変化していき、乳母や養育係を想定していたヴァランベールからボワルギヤール、バレクセルへと時代を経るごとに徐々に

<sup>43</sup> Jean-Jacques Rousseau, *Émile ou De l'éducation*, t.1, Deux-ponts, Sanson et compagnie, 1792, pp. 230-232.

<sup>44</sup> ジュネーヴ事件はダランベールが執筆した『百科全書』項目「ジュネーヴ」(1757)に対して、ルソーが『ダランベールへの手紙』(1758)で反論した事件である。詳細は佐藤淳二「コンテクストとしてのヴォルテール:『百科全書』項目「ジュネーヴ」の宗教論とその周辺」、『仏語仏文学研究』第15号、1997年、21-42頁を参照のこと。

<sup>45</sup> 「母親が子供を養育するようになれば、道徳は自ら改革され、自然の感情がすべての心に目覚め、国は再構築されるだろう」(Ibid., p. 46.) 『エミール』が当時の家族観に与えた影響についての詳細は、Lynn Hunt, *The Family Romance of the French Revolution*, London, Routledge, 2013[1997]. (リン・ハント『フランス革命と家族ロマンス』(西川長夫・平野千果子・天野知恵子訳)平凡社、1999年)を参照のこと。

<sup>46</sup> Claude Guérin, *op.cit.*, pp. 13-30; Jacques Ballexserd, *op.cit.*, pp. 28-43.

両親、特に母親の役割を増大させていったと言える。とはいえ、社会的影響力としては『エミール』の方が明らかに大きかった。それは『エミール』以後の育児マニュアルにおけるジャンルの一つ、「母親たちへの意見 *Avis aux mères*」の台頭と関連付けられる。五回も再版されたベストセラー、ル・ルブール夫人『自らの子供を養いたい母親たちへの意見 *Avis aux mères qui veulent nourrir leurs enfants*<sup>47</sup>』（1775）を筆頭とする、外科医ゴージェ『新・自らの子供を養いたい母親たちへの意見 *Nouvel avis aux mères qui veulent nourrir leurs enfants*<sup>48</sup>』（1783）や内科医ロズ・ド・レピノワ『授乳したい母親たちへの意見 *Avis aux mères qui veulent allaiter*<sup>49</sup>』（1785）といった作品群は、新米の母親にアドバイスを送るというスタンスで書かれたが、これらの著者には医師だけでなく、ル・ルブール夫人のように経験豊富な母親も含まれていた。当然、これらも育児マニュアルとして衛生と体操を二本柱とする身体教育の問題を扱っており、説得対象の変化を如実に表している。また、このジャンルからはメヌレ・ド・シャンボー『天然痘と麻疹についての母親たちへの意見 *Avis aux mères sur la petite vérole ou la rougeole*<sup>50</sup>』（1770）やロ・ド・ボワッシー『種痘の問題に関する母親たちへの意見 *Avis aux mères au sujet de l'inoculation*<sup>51</sup>』（1775）といった種痘について専門的に扱った作品も登場し、作中で子供の種痘接種を推奨した。こうして、子供に対する種痘接種の判断も徐々に生来の愛情を持つとされる母親の役割として確立されていった。以上のように、種痘の問題は特に1760年代以降、身体教育の重要なカリキュラムとして組み込まれていった。しかし、「母親たちへの意見」は医師による教育論だけでなく、様々な著者の教育論を含んでいる。これは育児マニュアルが教育に参入することで他分野との合流を果たした証左として提示できよう。

## おわりに

以上、本論は医師が執筆した16－18世紀の育児マニュアルを時系列に分析し、身体教育の形成過程を解明してきた。その結果、「身体教育」という語彙の登場が18世紀中盤であっても、子育てにまつわるカリキュラムの形成が既に16世紀の段階から確認されることが判明した。そしてボワルギャールは、内面の教育との連関を意識しつつ、衛生と体操の問題を子育ての最重要

<sup>47</sup> Marie-Angélique Anelle Rebours, *Avis aux mères qui veulent nourrir leurs enfants*, Paris Théophile Barrois le jeune, 1775.

<sup>48</sup> Charles Daniel Gaultier de Claubry, *Nouvel avis aux mères qui veulent nourrir leurs enfants*, Paris, Chez l'auteur; Lottin le jeune, 1783.

<sup>49</sup> Roze de l'épinoy, *Avis aux mères qui veulent allaiter*, Paris, P. F. Didot le jeune, 1785.

<sup>50</sup> Jean-Jacques Menuret de Chambaud, *Avis aux mères sur la petite vérole ou la rougeole, ou lettres à Madame de \*\*\* sur la manière de traiter & de gouverner ses enfants dans ces maladies*, Lyon, les Frères Perisse, 1770.

<sup>51</sup> Louis de Laus de Boissy, *Avis aux mères au sujet de l'inoculation, ou Lettre à une dame de province, qui hésitait de faire inoculer ses enfants*, Londres, Des Ventes de la Doué, 1775.

課題に掲げ、天然痘に強い関心を寄せていた。彼のこうした傾向は後代との共通項として指摘できるが、同時に育児マニュアルが対象とする子供は、当初、限定的であったと言える。だが、デカルト主義的医学機械論が擡頭すると、子供の身体への直截的介入に関心が移行した。ゲランからボワルギヤールまでの育児マニュアルは、子供の身体の歪みを予防・矯正することを重視し、従来の衛生と体操の問題への関心が一時的に後退した。しかし、ヴァンデルモンドの著作は、同じく身体の歪みを問題としつつも、旧来の問題に回帰した。その後、子供の身体の歪みに対する関心は、コレージュ改革を背景として、徐々に教育の問題へと収斂していくこととなった。そして、ブルーゼとデゼッサルツによる過渡期を経て、最終的にバレクセルが「身体教育」の語を創出したのである。

身体教育の誕生は種痘論争とも密接にかかわっており、種痘論争の論者が子供の身体教育に言及する例も多数見られたが、彼らは育児マニュアルで種痘に言及するかどうかを戦略的に選択していた。また、教育における母親の役割の増大は、従来ルソーの功績とされてきたが、育児マニュアルが唱道する身体教育はそれ以前から母親を重要なアクターとして認識していた。これが「母親たちへの意見」のような作品群の誕生につながったのである。

このように身体教育はその歴史的背景に鑑みれば、子供の健康維持への多様な問題意識から用いられる語であり、少なくとも18世紀においては身体能力向上のための運動のみを対象とする語彙ではなかった。種痘をはじめとする衛生の問題は、内科医が教育の領域に参入し、自分たちの公的有用性を示すうえで重要な意味を持ったに違いない。そして、こうした身体教育の異なる相貌は、子供をめぐる近世フランス史研究に新しい視角をもたらすものではないだろうか。

図1 『整形外科学』扉絵



図2 正しい歩き方





図3 良い椅子

